

8 遺物

クラスのみんなが、エリザベスのまわりに集まってきた。スチュアート先生も。

「いったい、この絵は、どれくらい前のだろう？」先生は、しきりにそれを知りたがっている。額縁がくぶちを指でたどりながら、ガラスをそつとたたいてみたりしている。「この頭巾ずきんは……」先生はほとんどひとりごとのようにつぶやいた。「ひよつとすると、十八世紀のものかもしれないぞ」

「独立戦争のころのです」とエリザベスはいった。

生徒たちがいつせいにエリザベスを見る。

カレンが絵を指さした。

「この子、ちよつと似てない？ その……」

エリザベスは自分の顔に手をやった。

「わたしに、でしょ？」

「すつごく似てる」とアニーがいつて、エリザベスにはじめてほほえみかけた。

エリザベスはほほえみかえして、ズイーの絵に目をもどした。

ズイーのかぶっている頭巾ずきん、頬ほおに垂れかかったふんわりした長い髪かみ、肩かたをおおって胸の上で交差して結ばれているショール、そのどれひとつ、エリザベスと同じものはない。

エリザベスの髪かみはカラーですじを入れた直毛だし、服はフードのついたパーカーとジンズだ。

ただし、ひとつだけ同じ点がある。

どんなに髪かみにクシを入れようと、新しいセーターを着ようと、結局、なぜかともななくみだれたかっこうになってしまうのだ。ズイーと同じで。

それを思うと、エリザベスは、額縁がくぶちの中の二百年前のズイーを抱だきしめたくなくなってしまう。

スチュアート先生は、まだ顔をあげない。ズイーの絵から目をそらすことができないらしい。